

ばってん

事務長会報第17号

平成17年3月31日

長崎県公立学校事務長会

長崎北高等学校内
〒851-1132 長崎市小江原1丁目1-1
電話 095-844-4411



ホテルモントレ長崎
TEL 095-822-2251
長崎市筑後町4番10号

授業料システム構築奮闘記

事務局長 岩 永 道 雄 (長崎商業高等学校)



県内唯一の市立高等学校であるためか各種の業務処理は手処理が多く、赴任以来、その効率化に取り組んできたが授業料システムも懸案となっていた。

昨年、県立学校において導入された校納金システムの開発に伴い県立学校の事務処理との共通点も多く使用頻度も多い点を考慮し、本校においても同時に導入するべく市教委と協議し、導入を決定した。

構築前に必要な業務分析では、県立学校の事務処理と共通する処理は校納金サブシステムとして構築されるので、県と異なる業務についてのみ法的根拠、処理手順・各種帳票等を検討し、市教委と協議すればよかったためかなりの部分で省力化できた。

その中で、市の決裁規定により授免決定者の還付は市教委で行うため、還付請求書の添付書類として銀行からの口座振替領収済通知書のうち決定者毎に各月の納入実績ページを何枚も複写して提出してきたが歳入徴収簿様式へ決定者全員の授業料納入データを印刷することに変更するなどいくつかの事務処理を簡略化することができた。

システム構築が業務改善そのものであることを実感するとともに、担当者も改めて日常の業務処理の根拠について再確認できた作業であった。

次に、システム構築に際して、最も重視したのがデータの信頼性や構築後のメンテナンスである。

データの信頼性の確保については、セキュリティも考慮し、根幹部分は校納金サブシステムから得られるCSVデータを活用し、新たなデータを生成するのは現金領収書発行に必要な未納番号や発行番号を付与する機能などに限定した。

また、構築後のメンテナンスを考慮し、可読性を重視したマクロの記述や説明文の詳述に力点を置くとともに、エラーの修正の際には必ず担当者を立ち合わせ、詳しい説明を行った。これによって、担当者はどのCSVデータが、本システムのどこに関連づけているのかを理解し、マクロの意味を深く理解していなくとも、マクロの修正が可能となった。

さらに、システム構築者の独断的発想により運用

段階での使い勝手が課題となるシステムも多いことから、具体的な画面構成などを含めて担当者と意見交換を重ねた。

仮構築後、時間的な制約から運用しながらのシステム検証を余儀なくされたが、数々の難関を乗り越え2月になってやっと完全稼働することができた。その中で得られた教訓は数多い。

エクセル2000での稼働実験もほぼ終了し、エクセル2003にシステムを移した途端、マクロが全く機能しなくなってしまった。1か月後、バージョンアップによるデータ型の厳密化に伴うトラブルと判明したが、ソフトのバージョンアップ情報の重要性を初めて意識させられた教訓であった。

11月には、ほとんどの機能が設計どおり稼働し始めたが、CSVデータの収納者の生徒コード及び請求月データを未納者リストに突合せ、未納データを削除するというシステムの根幹機能ともいえるべきマクロが一部の未納者データを削除しないトラブルを解消できないまま越年。手動でデータを修正することはシステムの信頼性に関わることであり、エラーの規則性を把握しようと色々試みるが原因が特定できない。再構築も覚悟しながら日常的になっていたシステムチェックに入ったある日の朝、歓喜は突然やってきた。データを突合する繰り返し処理の中にデータの削除を組み入れたため突合回数が不足するという初歩的な単純ミス。デバッグ手法の未熟さを痛感するとともに、思いこみの怖さを再確認した次第である。

このシステムの構築によって、手作業であるが故に必要なであった各段階での様々なチェックが不要となり、正確性・効率性を高めるとともに組織としての事務処理能力をわずかでも向上させることができたと思われる。

この約7か月の苦悩は、今後ますます必要性が高まるとされる業務処理のシステム化を図るうえで必要な技術や構成力を養うという点において数多くの教訓を与えてくれた貴重な経験であった。

民主主義

西彼杵高等学校 齊藤 俊和

学校・教職員を取り巻く環境が騒々しい。生徒や教職員が原因となる学校内外での事件・事故、教育内容から教育制度の問題まで、新聞・テレビ等のニュースにならない日がない。思うにコンピューターの普及に比例したかのごとく学校への非難・批判の量も増加した。コンピューターの発達情報は情報の絶対量も伝達スピードも増大させ、その伝達範囲は地球規模になり、民主主義世界の拡大に寄与している。世界の人々はそれぞれの国の文化を発展させると共に他の国の生存権も尊重しながら、さらに世界共通の新しい価値観も創出しなければならなくなった。

何時でも何処でも誰でも何でも云える世界は面倒ではあるが、非難・批判を乗り越えることで新しい社会体制を生み出していける。日本国憲法第3章第12条『この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない。』とある。民主主義とは手続きも面倒な制度ではあるが、世界平和に寄与できるのは宗教ではなく民主主義という社会体制ではあるまいか。

日本人だけで生きている時代では100%の説明をしないでも理解し合えたが、宗教も環境も言語も異なる世界中の人々と多様なメディアを通して言いたいことを言い合う現代では、日本人の持つ思い遣りや謙譲は相手の侮りを増長し、論戦上の敗北を意味する。“大まかな善意は緻密な悪意に足下をすくわれる”結果になっている。偽札もフィッシングも外国人犯罪も『平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、我らの安全と生存を保持しようと決意した』日本人の国民性から見て、我々が最良・最善の知恵を出し、努力と妥協を積み重ね、遮二無二生きて行くことによって解決するだろう。

それにしても30代の事務職員との会話に通訳の必要性を感じる程意思の疎通が図れずにストレスを溜め込んでしまう現実辛いものがある。20代の事務職員と一緒に働いていないことを単純にラッキーと喜んでいいのだろうか？サラリーマン川柳の世界を笑ってばかりはいられない。事務室の中でも民主主義は不断の努力を必要としている。

● - 事務職員 - ●



諫早農業高等学校 主任 末永 郁雄

通勤途中、車のラジオから「散弾銃 26,000円……」という元気な声が流れてきた。物騒な話だと思ったが、よく聞いてみると、正月のおせち料理のCMだった。「散弾銃」と思っていたのは「三段重」であった。また、新任の頃、勤務先で「石木小学校からガスの件でお電話です。」と同僚に言われ、変だなと思いついてみると、電話の相手は「西九州ガス」の人だった。こういう勘違いは笑い話で済まされるが、仕事をするうえで、意思疎通を図りコミュニケー

意見 異見 違見

学校の外の安全対策

佐世保北高等学校 主任 辻 信之

小学校の通学路沿いにある職員住宅は、駐車場から車を出すとき視界が悪く、登下校する子どもたちに充分気をつけながらも、危険な状況でした。また、住宅前のその市道は坂道で、側溝の蓋もなく、特に雨の日は小さい子供にとって危ない道であり、少しでも視界をよくするため、住宅のブロック塀を撤去する計画を立て、市役所にも安全対策として溝蓋の設置はできないか相談に行ったのですが、側溝の整備は町内会からの要望が多く数年待ちの状態です。こちらが要望したところは全く計画にあがっていませんでした。しかし、場所がスクールゾーンであり、担当者に危険なところであることは認識してもらったのです。順番待ちするならば、何年先になるかわからないので、市教育委員会で状況を話し、通学路を使う小学校長に現地を確認してもらってから要望書を出してもらったところ、一部ですが3ヵ月後には溝蓋が設置されたのです。その後ブロック塀を撤去し、通学する子どもたちの安全確保ができましたが、その工事中に近隣の方が「ここは、前から子供が通るので危いと思っていた。」といわれました。長年住んでいる地域の方は以前から気づいていても、学校にも、職員住宅の住人にも申し出がなく、周辺の声が聞こえなかったのです。

学校の安全対策は、特に気をつけて見回りもし、職員からの報告もあり、早急に対応できますが、例えば通学路に街灯やガードレールや階段の手すりなどを設置したくても、そこが市道であれば自分たちでは直接できません。道路管理者に要望するにしても、そこに地域の方の声が一緒にあれば、学校単独で行うより大きな力になることは間違いありません。学校予算ではできない学校周辺の安全対策は、地域の方や学校とも一緒になって、関係機関にお願いできるような関係ができれば、生徒や地域の方の安全確保につながるのではないのでしょうか。

ションを円滑にすることは大切である。自分が意図していることが相手にうまく伝わっているかどうか、相手の話をよく聞いて理解しているか、常に考えなければならぬだろうが、難しいことである。学校には業者をはじめとして多くの方が訪れるので、特に外部の人に対しては分かり易い言葉を使うとともに、各種行事の案内状や保護者に対する文書などは、できるだけ簡潔で理解しやすい表現を用いるよう心がけたいと思う。行政の用語には特殊なものも少なくないので、自分が望むことが相手にうまく伝わらない場合もあり得る。私は昔から一人合点が多く、思いこみが激しくて、その多くが思い違いであるという指摘を受けることがよくある。反省しつつも、習慣は「ダイ・ハード」であります。

会 員 漫 筆

漆 器 造 り

清峰高等学校 岩 本 眞 人

漆器と関わって8年ほどになるが、泥沼にはまったりとやや後悔している。奥が深く手間と時間がかかりすぎて大変なのだ。器の木地造りに2~3ヶ月、漆に4~5ヶ月、失敗するとやり直して数ヶ月を費やすこともある。将に1年がかりの大事業だ。

漆は塗っては乾かし、次々と塗り重ねるのではなく、乾いた漆は必ず研磨材で研ぐ作業を伴う。これは次に塗る漆の食い付きと平面を保つために不可欠の工程だ。私流の漆は30回塗りを目安にするため、表裏で塗ること60回に及ぶ。漆の乾固は塗り1回に丸1日以上を費やし、ゆっくり乾かす運びとなる。完成までは夥しい時間の経過を必要とするのだ。そして、塗った器は漆室(うるしむろ)で管理する。漆の乾固には適度な温度と湿度が必要で、保冷パックや濡れタオルなどで微調整をはかる。

漆塗りの工程は木地固め・下地造り・下塗り・中塗り・上塗り・化粧塗り・艶出しの順を経て終了する。ここでは紙面の都合上、木地固め・下地造り・上塗り・艶出しの紹介に止める。

木地固めは下塗り用の生漆をテレピン油で希釈し、飽和するまで木地に吸い込ませる。漆を十分に吸い込んだ木地は狂いが生じにくく強いからだ。

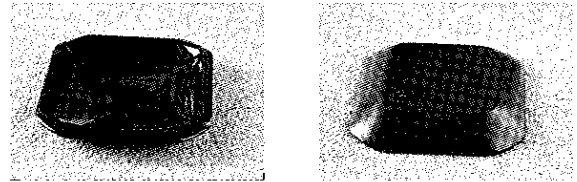
下地造りは生漆と砥の粉を練った漆(サビという)を何層も塗り、頑丈な基礎部を築く技法である。堅

牢な漆器造りにはこの工程は必要不可欠だ。

上塗りは朱合漆と好みの顔料を混ぜ、練り、最終の色造りとして塗る。完成した器の彩りはこの塗りで決定される。だから、この作業では失敗が許されない。留意すべきは縮みと研ぎだ。縮みは漆の乾きが早すぎた場合、表面だけが乾固し、中身が濡れたままの状態のときにおきる。表面張力で梅干しのようにシワシワになり、やり直す以外に方法がなくなる。始末に負えない代物である。ここでの研ぎは砥の粉を水で練ったものを指先の脱脂綿につけ、全体を少しずつ丁寧に研ぎあげる。均等なスリガラス状の光沢面が仕上がるまで丹念に続ける。集中力と緻密さと根気を最も要求される工程である。作品の出来栄はこの技術力で決定するといつてよい。

艶出しは微粒の研磨粉を植物油で練り、それを指先の脱脂綿につけ全体を丁寧に研ぐ。その後、研磨粉をつけた掌で、表面に付着している油練り研磨粉を拭き取るまで擦り続ける。この作業を終え、ようやく光沢を持った漆器が完成するのである。

鎌倉彫に魅せられ漆器造りを始めたが、彫刻を重んじるこの手法では漆の堅牢さに疑問が残った。それは漆を厚く塗ると、かえって彫刻部のメリハリが損なわれてしまうためだ。新聞で縄文時代の朱漆が取りざたされた。何千年もの時代を耐え、凌いだ漆である。ならば千年後の私の漆器はどうなのか。そんな夢を追いつつ、泥沼から抜け出せないでいる。



先輩から

職場を離れて三十年になりですが、在職当時のことは昨日今日のことのように思われて、みんななつかしいことばかりです。

俳句を始めたのは還暦のときでしたが、このことは現在の私にとって生き甲斐のひとつだと思っております。

美しき胸を反らして弓始

飛び石のじゃんけんぼんや

水温む

水郷が招くポスター

盛夏くる

ほろ酔ひは風にもありて

花芙蓉

木枯の太刀打ち出来ぬ

木のこぶし

(元・長崎北高等学校事務長)

尾崎敏雄

ウキのここがすばらしい

わが校自慢

口加高等学校 中山 健一郎

本校は明治35年に口之津女子手芸学校として開設され、その後口加高等女学校を経て昭和23年に現在の口加高等女学校となりました。当時は小浜、北有馬、南串山、加津佐の4つの分校が設置されており、地域の中心校としての役割を果たしてきました。平成14年に創立百周年の記念式典を挙行した伝統ある学校です。

さて歴史の自慢をした後は、施設に目を向けますと先ず目に入るのが中庭の素晴らしさ。「あやめ園」と名付けられたこの庭園は、昭和54年特別教室棟が竣工した事を機に若き学徒に憩いの場を設けるとの目的で計画されました。名前の由来は、昔からこの地をあやめが丘と称して、高等女学校の時代から校章にあやめを刻した事によるもの。

教室棟と渡廊下から丁度口の字型に囲まれた中庭(1400㎡余り)に高低差を利用した三段の池を配し、周囲につつじ、さつき、まめつげ等の灌木と寒椿、黒松、かえで等を含めて約220本が植栽されています。上の池から順々に流れ落ちるせせらぎの音を聞きながら、池の錦鯉を眺め木々の間を散策すると、正に安らぎの気分。来訪者にとっても恰好の記念撮影ポイントになっています。

次に外に目を向けますと平成2年に竣工し昨年新しく整備された第2グラウンドがあります。300mトラックとハンドボールコートがあり、陸上競技部専用として投てき競技用の各サークルとやり投げ助走路を完備。更に特筆すべきは従来のクレイコースの他に100m走と跳躍助走路(60m)用にタータンコースを新設した事。この恵まれた施設で練習に励んだおかげで16年の埼玉国体女子やり投げで、見事日本高校新記録で優勝しました。

本校では全国大会で優勝した時(つまり日本一になった時)記念のプレートを作りグラウンド脇にある顕彰台に取付けます。長崎ゆめ総体に続き7枚目のプレートが仲間入りしました。どんな施設の自慢よりも、日本一になる生徒がいるという事が一番の自慢です。

随 想



遊びという名の志

長崎県高等学校体育連盟会長・長崎西高等学校長 石井 勝典

「遊び」と「仕事」の境目はいったい何処にあるのだろう。連休中に仕事をたくさん片づけようとおもい、幾袋もの書類と道具を家に持って帰ろうとした。その時「そんなに、どうするんですか」と声をかけられたので、「休みに仕事をしたいんで…」と答えた。そしてすぐ表現の矛盾に気づき、おもわず苦笑してしまった。

日本人が「仕事と休み」を対立的なものとして取り扱うようになったのはいつ頃なのか。仕事をしない時間が「休み」であり、その休みに仕事をするなんておおよそ許されざることだとなってしまった。

が、私の心に矛盾はまったくない。「やりたくてたまらないものを、休みだからこそ一気にやり遂げたい」という期待があるだけだ。それはあたかも子供のような遊び心である。「早く完成させて、どんな姿になるのか見てみたい」という矢も楯もたまらない心境、逸る気持ちがそこにある。

「読書は仕事か・遊びか」という質問ほど教師を悩ませる質問はない。教材研究とみなせば「仕事」、趣味ととらえれば「遊び」となる。職人にとって「ものづくり」は仕事でもなければ遊びでもない。自分そのものである。ひょっとすると自己実現かもしれないし、熱中という病気、はたまた心の根底から湧き出る執念かもしれないのだ。

やらずにはいられない気持ちが「渴き」となって、人を仕事へと駆りたてる。そこには喜びこそあれ、

苦痛はない。いや、たしかに苦しみはあるだろう。しかしその苦しみこそが快楽であり、困難を乗り越えたときの自信と誇りを与えてくれるのだ。

もともと労働とは喜びではなかったのか。そして勤勉であることは尊ばれることであった。ところが現代では、苦痛、負担というニュアンスを含むようになってきている。大人がそうであるならば、フリーターと呼ばれる若者が増大するのも無理からぬ話である。

一日のうち、起きている時間の半分以上は労働だ。もし労働が苦痛なら、人生とは、さぞかし辛い日々の連続に違いない。最近では、与えられた仕事を「負担」という意識でとらえる傾向も強くなった。負担という価値尺度はとても恐ろしい。なぜなら、どんなに素晴らしい行為も意義ある仕事も、費やす時間量の「負」価値で否定できるからである。そして「仕事に縛られた自分」と「仕事から解放された自分」の二極化が生じる。しかし、そこから何が生み出されるのだろうか。

仕事には、明日につながる取りくみ方と、つながらない取りくみ方があるようだ。両者を分けるのは仕事の内容ではなく、扱う人の心の在り方による。自己実現・夢などはその重要なキーワードたりうる。スポーツ選手を眺めていればそのことがよくわかる。苦しい練習のなかに光る目があり、自分が向上する喜びを体で感じ取っているからだ。

「仕事」と「遊び」を融合しているものは、「道」・「志」などの心象ではないかと思ったりもする。やりたいことには「やりがい」があり、生きることには「生きがい」がある。「かい」ある人生には方向性が生じ、方向性ができると道・志が生まれる。やりたいこともたくさん増えて、時間はますます欲しくなる。

生きがいの源泉は私たちの周りに満ち溢れている。仕事は自分という人間の表現なのだ。仕事と正面から向かい合える自分がいるということは、なんと幸せなことだろう。さあ今日も、仕事に遊ぶわが身を楽しもう。

編集後記



この「ばってん17号」の発行を仕事納めとして、現・広報部は新たな陣容に今後を託すこととなった。これまでの御協力にはお礼を述べるばかりである。

さて、今号の随想は県高等学校体育連盟会長の石井勝典先生に御執筆いただいた。年度末間近の御多用な時期であるにもかかわらず御快諾くださったことに、心から感謝を申し上げたい。

ところで、この欄は表向き「編集後記」と銘打っているものの、いつも決まって看板倒れ、編集後記とはほど遠い中身に終始したことを詫びねばならない。などと殊勝ぶった物言いの舌の根も乾かぬうちに、ほら、もう元の木阿弥だ。ああ、この性怒りのなさといったら。

昨年暮れのある日、私はチベットの都ラサから東に四駆車を走らせていた。あたりは枯草色の茫茫たる荒れ野だ。一抱えほどの氷がここかしこに転がる。薄い空気、チベット高原の厳しさを思い知らされる。

かつて幾多の探検はして、やっと存在が確かめられた「幻の高峰」を、この目でしっかりと見届けるために、私

はここまでやって来た。胸が躍る。

「ラサから80km」と記された標識からさらに一走りしたあたり、およそ100kmほどとおぼしい所で、私は行く手に一人の人物を小さく認めた。やがて人物との距離が縮まり、その動きがはっきりと見えた時、私は息を呑んだ。彼は、あの「五体投地」を繰り返しながら、こちらに向かってくるのではないか。チベット仏教（ラマ教）で無上の祈りの形とされる五体投地を初めて目の当たりにして、私はうろたえた。にわかには信じがたい出来事だったからだ。

頭上で合掌した手を胸まで下ろし、次いで両腕を前に差し出しつつ、全身を地面に投げ出して祈る。そして立ち上がった自らの身長分だけ歩を進めては、また同じ祈りを繰り返す。これが五体投地だ。

現地ガイドに問うと、彼はラサの古刹へ詣でる巡礼だという。それを聞いた途端、思いもかけず私の目から涙が溢れた。はるか100kmもの彼方には、自分を暖かく迎えてくれるであろう仏のおわします寺がある。憧れのその寺を目指して、彼はいま栄光と喜びとにつつまれながら五体投地の旅を続けているのだ。きっと幸せに満たされた旅なのだろう。だんだんと遠ざかっていく巡礼を、私は涙を流しながら手合わせて見送った。粗末な衣服をまとったあの巡礼は、あのとき私にとって仏だったのではあるまいか。いま、私はチベットが懐かしくてならない。(に)